

「総合的な学習の時間」における探究学習

愛知県・私立金城学院中学校・高校

「問い」にこだわる探究学習を実践

金城学院中学校・高校では、調べ学習に終了した従来の「総合的な学習の時間」の反省から、研究に必要なスキルを徹底的にトレーニングし、「問い」の設定を重視する探究学習への転換を図った。2016年には新しい学力観への対応、育てたい人材像の浸透を目的としてランドデザインの改訂を行い、さらなる深化を目指している。

「感想レベル」の研究に 終了した初期の探究学習

金城学院中学校・高校が、「総合的な学習の時間」（以下、総合学習）における探究学習の見直しに着手したのは2006年のこと。同校では、01年から「共に生きる」をテーマとする探究学習を行ってきた。1年次は福祉問題、2年次は国際問題についてグループでテーマを決めて探究・発表を行っていたが、多くのグループが一般的な感想や希望を述べるにとどまっていた。総合学習の立ち上げからかわってきたカリキュラム研究部長の柳瀬公代先生は言う。

「探究に必要な問いの設定や情報

集・分析、分析結果の報告などのトレーニングをしないまま取り組み始めたため、単なる調べ学習、結論ありきの探究で終わっていたのです」

その原因を探るため、教師たちが生徒の発表内容を分析したところ、調べ学習と探究の違いを理解していない生徒が多いこと、研究法のトレーニングが欠如していることが原因であると分かった。そして07年、教師たちは総合学習の改編に着手する。よりどころとなったのは、シチズンシップ教育で使われる「スキル・ベイスド・アプローチ」だ。情報収集・分析の方法をスキルと捉えてトレー

金城学院中学校・高校副校長
長屋頼子 **ながや・よりこ**
教職歴35年。同校に赴任して36年目。「すべての活動が、生徒一人ひとりの成長や将来のキャリアにつながるものにしていきたい」



金城学院中学校・高校
柳瀬公代 **やなせ・きみよ**
教職歴25年。同校に赴任して26年目。カリキュラム研究部長。「物事の見方や考え方の転換をもたらす授業をデザインしたい」



金城学院中学校・高校
山崎貴美 **やまざき・たかみ**
教職歴17年。同校に赴任して18年目。国際教育課。「生徒がどんな時でも前向きに歩むことができるように、常に笑顔で！」



金城学院中学校・高校
中山大輔 **なかやま・だいすけ**
教職歴15年。同校に赴任して9年目。企画広報担当。「一人ひとりが大事にされていることを、生徒たちに感じてもらいたい」



金城学院中学校・高校
水野志帆子 **みずの・しほこ**
教職歴12年。同校に赴任して13年目。企画広報担当。「生徒の喜びや悲しみを共有しながら、一緒に成長していける教師でありたい」



金城学院中学校・高校
山内麻記子 **やまうち・まきこ**
教職歴12年。同校に赴任して13年目。企画広報担当。「正解を示すのではなく、生徒に寄り添う姿勢を常に持っていたい」



ニングする手法で、1年次は探究力を養うための基礎づくり、2年次は研究の実践トレーニング、3年次はその集大成として小論文に取り組み。

愛知県・私立金城学院中学校・高校

◎女性の社会的地位の向上を目指して創立されたプロテスタント系ミッションスクール。スクールモットーは「主を畏れることは知恵の初め」。

◎設立 1889（明治22）年

◎形態 全日制／普通科／女子

◎生徒数 1学年約320人

◎2016年度入試合格実績（現浪計）

国立大は、千葉大、名古屋大、名古屋工業大、三重大、神戸大、奈良女子大、愛知県立大、名古屋市立大などに18人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、東京理科大、早稲田大、金城学院大、南山大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ339人が合格。

◎URL <http://www.hs.kjho-u.ac.jp>

ランドデザインにより 取り組みのねらいを共有

08年には、探究学習のプログラムを通して身につけさせたい力を教師間で共有するために、夏季休業中に有志が集まり、教育活動の基本姿勢を示すランドデザインが練られた。学力を「知識・理解」「価値・態度」「活用力」の3要素で捉え、その3つの学力をバランスよく身につけることで、同校の目指す「自立・自律・連帯できる女性」を育成することが確

認められた。

同校の総合学習が「Dignity」と名づけられたのも、この時である。「Dignity」は品位・尊厳といった意味だが、6代校長のエラ・ヒューストン氏がしばしば生徒に語りかけた言葉だという。長屋頼子副校長は、「『Dignity』を持って行動できる人は『深く物事を考えることができる人』であるという考えに基づいています。グラントデザインとともに本校の総合学習で育てたい力を象徴する名称だと思えます」と、「Dignity」のねらいを語る。

同校の総合学習は週1時間。授業は12〜13人の総合学習担当教師が行う。「担任が指導する案も検討しましたが、他校の実践事例から、一気に学校全体に広げようとする、足並みをそろえるのが難しくなると考え、有志の先生方で指導にあたることにしました」と、柳瀬先生は説明する。「毎年メンバーの入れ替えがあり、現在、全教師の4割程度が『Dignity』の授業を行えるところまで来ている。どのような研究テーマにも対応できるように、ほぼ全教科の教師が担当メンバーに入っている。

1年次はテキスト批評で論理的な文章を作成する力を育成

1年次はテキスト批評を通して、レポートや論文を書くための基礎力を身につける。最初に簡単な文章を読んで、ピラミッドストラクチャー（書かれている問い、それに対する筆者の主張と根拠を構造的に整理する手法）やパラグラフライティングの手法を使い、論理的な文章を書く練習を行う。その上で、社会問題をテーマとしたブックレットから1冊を生徒が選んで要約・批評を行い、グループ単位で批評文を作成・発表する。

「今の生徒に足りないのは文章を読解する力。ブックレットは本格的な論文ではありませんが、必ず筆者の問題意識に基づく問いと主張、その根拠が述べられています。課題から具体的な研究へどのようにアプローチしていくのか、ブックレットを通して理解させるとともに、論理的に文章を読む力・書く力を身につけさせたいと考えました」（柳瀬先生）

グループ活動では、筆者の問い・主張・根拠を読み取り、それらを共有した上で、各自で作成した批評文

図1 リサーチエスチョン演習

No.10

学年	科目	単元	名前
----	----	----	----

リサーチエスチョン演習1

目標：検証可能なリサーチエスチョンを立てることができる。

研究の条件

- 研究知見の発表は2016年12月号2番です。
- 調査は校内で行う必要があります。

1. 研究テーマを調べましょう。
(研究テーマの例) デジタル 読書教育 フェアシェア 若者とは何か

1人、1つずつ研究テーマを書きましょう。
グループで討論した上で、グループの研究テーマを決めましょう。

2. テーマごとの問いの候補を各自で書きだしましょう。No.9のワークを参考にしましょう。(個人のアイディア)

3. 各自のアイディアを共有し、グループで討論した上で、グループとしてのリサーチエスチョンを設定しましょう。

4. グループで発表を準備しましょう。

5. 仮説を検証するために必要な調査(小さな問い)を、質問形で書きだしましょう。
最初は個人で考えて書いてください。その後、グループで共有してください。

6. 設定したリサーチエスチョンは、決められた研究条件の中で検証可能なかどうかをグループで判断する。
検証できると判断した場合は、仮説をもとに調査計画し、リサーチエスチョンをつくり出す。

*学校資料をそのまま掲載。

を持ちより、グループで完成させる。そして、導入・要約・批評から成るプレゼンテーションをクラスで行い、

クラス代表が学年全体で発表する。クラス審査は審査項目に基づいて生徒同士で行う。審査項目は、要約

や批評の要点が簡潔明瞭か、著者の問いが明確に示されているか、自分の意見とその根拠が明確に述べられているかなどだ。「他グループの審査を行うことで、よい要約や批評、プレゼンとは何かを学ぶ機会になっている」と、長屋副校長は指摘する。

「大きすぎる問い」を提示し、 あえて失敗を経験させる

2年次は生徒が各自で「問い」（リサーチクエスト）を立て、その解決に向けて探究活動を行う。まず、研究の手順を学ぶためにミニリサーチ演習を行う。ここでは、「テレビ番組の種類と曜日・時間帯には、どのような関係があるか」といった身近な問いを通じて、資料検索や情報整理などの方法を学ぶ。

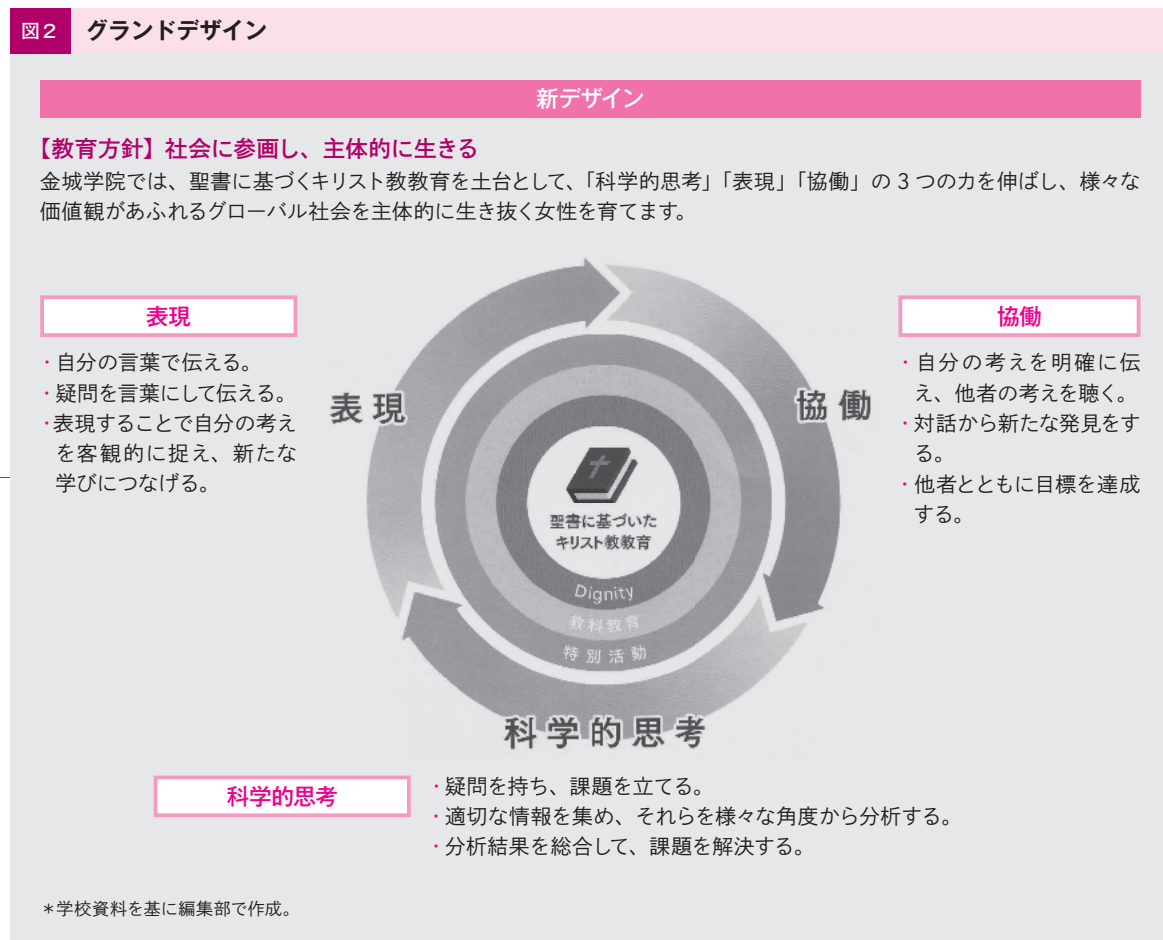
続いて「問い」の設定の仕方を学ぶ。ユニークなのは、練習のためにあえて「大きすぎる問い」を提示し、失敗させるためのワークを実施している点だ（図1）。生徒は4、5人のグループになり、「ファッション」「若者ことば」「少子化」などから興味

あるテーマを選ぶ。初めに自分たちで調べたいこと、知りたいことを仮の問いとして挙げ、それに対して社会的な背景・経緯・現状・信憑性など様々な角度から検討を加える。

次に「問い」に対する「仮説」を考え、検証するための「小さな問い」（「仮説」を検証するために必要な調査）を書き出し、さらに「仮説」を振り返る作業を経て研究対象となる「問い」を絞り込んでいく。このプロセスを経ることで、「問い」を焦点化しなければ適切な仮説やその検証方法を導き出すことができないことに気づかせるのだ。

この時、教師は机間巡視をしながら、各グループにアドバイスを与えていく。発足以来のメンバーである山崎貴美^{やまざき たかみ}先生は、「調査項目や方法が多く、研究の途中で困難が予想されるような場合は、『本当にできるの?』と問いかけ、もう一度、『問い』や『仮説』に立ち戻り、それらが適切かどうかを考えさせるようにしています。机間巡視の中で主体的に考えることができたグループは、ある程度うま

図2 グランドデザイン



くいきますが、教師の言われるがままにワークシートに取り組むだけのグループは本質的なところまで理解できません。「問い」を設定させる難しさをいつも感じています」と語る。

一連の学習が終わった段階で、2〜4人のグループを組み、本格的な探究に向けて、1学期中に仮の「問い」の設定までを行う。夏季休業中に研究領域に関する資料を読んでその報告書を書き、2学期からは「問い」「仮説」「調査方法」を設定してグループ研究に取り組み、最終的にクラス発表・全体発表を行う。

続いて、3年次に取り組む小論文のテーマを2年次の3学期中に決め、3年次の1学期間で書き上げる。テーマは自由だが、ほとんどの生徒が自分の将来の志望に近いものを選び、これが事実上の卒業論文となる。

21世紀型学力の育成に向けて 全校でグランドデザインを改訂

16年8月、同校は「Dignity」の立ち上げ以来、8年ぶりに学力育成のグランドデザインを改訂した。「知識・理解」「価値・態度」「活用力」を「科学的思考」「協働」「表現」に改め（P.

17図2）、教科教育や特別活動などあらゆる教育活動で3つの力を育成することを確認した。「08年当時と比べて、21世紀型学力に関する私たちの知識も増え、改めて次期学習指導要領に対応できるグランドデザインを作成しようと考えました」と柳瀬先生はそのねらいを語る。

新たなグランドデザインの策定は、15年度の夏季休業中の5日間をかけて行われた。校長の呼びかけに応じて多くの教師が議論に参加した。参加者は授業で感じる生徒の課題、育てたい力、生徒の強みや弱みなど、思いつくキーワードを自由に出し合い、図に整理した。さらに、それらを一覧表で集約した。

そのような検討のプロセスを採ったのは、学校全体で取り組んでいく意識を醸成するねらいがあったと、長屋副校長は明かす。

「従来の学力観は有志の教師がまとめたものだったため、必ずしも学校全体に浸透していませんでした。多くの教師が議論に加わることで、育成したい力を共有し、当事者意識を持って取り組んでもらいたいと考えました。たとえば、自分の意見が直接

反映されなかったとしても、自分も議論の場にいた、発言したという思いがあれば、取り組みへの意識も変わってくるのではないのでしょうか」

「Dignity」を通って 大学で必要なスキルを習得

「Dignity」の開始から約10年。学んだ研究・発表のスキルが、大学で役立っていると感じる卒業生は多い。山崎先生は「ゼミでプレゼンを行う時、戸惑うことなく準備を進めることができると、多くの卒業生が言います。本校の卒業生がリーダーシップを発揮しているという声は、大学の先生方からも伺います」と語る。

入試とのつながりを実感する教師も多い。企画広報担当で進路指導課の中山大輔先生は、「『Dignity』で学んだプレゼンの手法や研究内容に関する知識が、推薦・AO入試の小論文や面接で役立ったという生徒は少なくありません。『Dignity』で身につけた力が入試にも生かされるといって実感も、多くの先生方が持っていると思います」と力を込める。

個人レベルで「Dignity」のノウハウを踏まえた教科指導が実践され始

めたのも大きな変化だ。英語科の水野志帆子先生は「授業では『Dignity』の1年次で実践しているパラグラフライティングや要約の手法を取り入れています。今後はほかの先生方や他教科と連携しながら授業案をつくっていくことも視野に入れていきたいと思っています」と抱負を語る。

「Dignity」の担当者が、ほぼ全教科に及ぶことから、教科横断で情報交換する機会が増えたことも大きな収穫だった。「Dignity」を始めてから、職員室でも教科を超えて情報交換がなされるようになりました。探究学習の話題を通して、他教科の教師の知識や発想に触れることにより、私たち自身も視野を広げることができました」（長屋副校長）

一方、課題は、「Dignity」で育成する3要素を教科や教科外活動でも育成していくことだ。企画広報担当でカリキュラム研究部の山内麻記子先生は「Dignity」で育成している思考力や表現力、主体的な学習態度は、あらゆる教科で必要な力だと思っています。しかしながら、生徒自身がそのつながりを実感するまでには至っていないのが実情です。各教科で育ま

れた知的好奇心と『Dignity』を結びつける仕組みを構築していく必要があると考えています」と語る。

その一環として、同校では教科の授業の中で「問い」を見つげる仕組みを模索している。現在検討しているのは、各教科で生徒が疑問に思ったことや知識・理解を深めたいと思った事柄を、その都度生徒が専用ノートに書き留め、「Dignity」の授業で「問い」を立てる際に、そこからテーマを選ぶという仕組みだ。疑問や関心を持った事柄を書き留め、分類することで、自分が気づけなかった興味や適性が見えてくるとの期待もある。

もう1つの課題は、「Dignity」の成果を客観的に測る評価方法の開発だ。現在、ブランドデザインに沿ったルーブリック作成の真ただ中にある。

「情緒的なつながりが従来の日本の教育の特徴でしたが、グローバル社会では日本の価値観だけでは通用しません。教育を科学的に捉える視点を養うことで、学校全体の教育力をさらに高めていけるよう工夫していきたいと思っています」（柳瀬先生）

キャリア教育における探究学習

島根県立江津高校

キャリア教育の中に探究学習を位置づけ、社会における自分のあり方を深く考える

島根県立江津高校では、2015年度より「KAWARAプロジェクト」と称し、地域の強み・弱みを考える探究学習を推進している。16年度からはベネッセの「進路サポート」を導入してキャリア教育の基盤とし、その流れの中に探究学習を位置づけ、指導の体系化、教師の負担軽減を図っている。

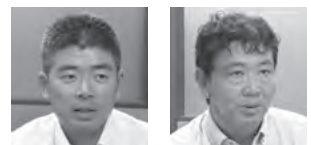
「KAWARAプロジェクト」で地域に根差した探究学習を開始

島根県立江津高校は、島根県中部の日本海に面する江津市にある小規模校である。人口減少や産業衰退が進む地域の実情を踏まえ、地方創生を担う人材育成を目標に掲げて、2013年度から3年間、「総合的な学習の時間」を利用した「Global Career Education」(GCE)と称するキャリア教育を展開してきた。

15年度、前任校で探究学習を主導してきた門脇勤先生が赴任したのを機に、同校は探究学習の再編に乗り出す。取り組みの理念を明確化する

ために、地域の地場産業である石州瓦にちなんで「KAWARAプロジェクト」という探究学習を、1年生でスタートし、より生活や地域に根差したキャリア教育を目指した。

「キャリア教育は、狭い意味での進学先選択や職業選択にとどまらず、社会の中での生き方、あり方を学ぶものだと考えています。そのため、地域の課題を探究していく中で学んでいくことが、身近でリアルティがあると考えました。瓦は一見、家や家具など目に見えるものだけを守っているように思いますが、実はその下には人々の生活や喜怒哀楽といった目に見えないものもあり



島根県立江津高校
永岡徹郎 ながおか・てるう
教職歴20年。同校に赴任して3年目。進路指導部長。「生徒とともに歩みたい。」

島根県立江津高校
門脇勤 かどわき・つとむ
教職歴16年。同校に赴任して2年目。キャリア教育地域連携推進リーダー。『どんな時代でも、挑戦し続ける人を育てたい』

島根県立江津高校

- ◎「思慮・高邁・貫徹」を校訓に地域・社会を幸せにする力を培う。13年度から3年間「地域でつなぐキャリア教育モデル事業」の指定を受けた。
 - ◎設立 1958(昭和33)年
 - ◎形態 全日制/普通科/共学
 - ◎生徒数 1学年約70人
 - ◎2016年度入試合格実績(現役のみ)
国公立大は、和歌山大、島根大、山口大、島根県立大、山口県立大に12人が合格。私立大は、京都精華大、摂南大、岡山理科大、広島文教女子大、広島工業大、福山大、徳山大、四国大、徳島文理大、福岡大などに延べ29人が合格。
- ◎URL <http://www.gotsu.ed.jp/>

ます。探究学習を通して、そうした目に見えない大切なものや課題に気づき、それを守ったり改善したりする経験を積んでほしいと思います」と門脇先生は語る。同校のキャリア教育にはもう1つ課題があった。探究学習やインターンシップ、